

# 児童の文章表現力を高める学習活動の開発

-意見文の型指導とルーブリック評価を活用して-

高度学校教育実践専攻  
教職実践力高度化コース  
一 柳 直 宏

実習責任教員 小 坂 浩 嗣  
実習指導教員 泰 山 裕

キーワード: 意見文の型, ルーブリック, 思考ツール

## 第1章 実践の課題設定と目的

### 1 実習校の現状と課題

実習校は、児童数 100 名程度の小規模校である。昨年度行ったアセスメント結果から、様々な情報を読み取ったり整理したりし、それらをもとに自分の考えを文章として表現することに対する課題が浮き彫りとなった。

### 2 実習課題に関する先行研究について

書く力について、大隈 (2014) は表層・中層・深層の三つの層があり、それらを同時に育てることこそが、真の書く力を育成することにつながるかと述べている。この考え方にもとづき、書くことへの興味・関心・意欲などの前向きな態度や、思考力・判断力などの認識諸能力を高めていきたいと考えた。

西中・大西 (2017) は、学校で扱う文種を教師がきちんと理解し、指導のポイントと推敲の視点を押さえることの大切さを指摘している。

清道 (2010) は、高校生が意見文を書けない要因が、学習する機会が十分でなかったことと、意見文という文種そのものの持つ難しさにあることを踏まえ、意見文の型を提示することによって、量的にも質的にも学習効果のあったことを報告している。

服部 (2004) は、トゥルミンモデルをもとに意見文を指導し、論理的に書き表すための『主張』『事実』『理由づけ』『裏付け』を生徒に意識させている。また、生徒にルーブリックで評価

項目を示し相互評価させることで、単なる印象による評価ではなく、より適切な評価ができたことを報告している。

実習校では、児童の文章表現力に課題があるとの共通理解のもと、書く活動に重点を置いた指導を行っているが、十分な効果をあげるまでには至っていない。特に、資料をもとに考えたことを説明したり、自分の意見を述べたりすることを苦手になっている傾向がある。そこで、西中・大西 (2017) や清道 (2010) の知見を参考に、文章表現力の中でも意見文に的を絞り児童の書く力を高めたいと考えた。さらに、服部 (2004) が実践したトゥルミンモデルを援用したルーブリックを活用し、評価規準を明示することで、実践の成果を検証したいと考えた。

### 3 実践の目的

実習校の課題を踏まえ、児童の文章表現力を高めるための学習活動を開発し、その教育効果について検証することを目的とした。

## 第2章 実践の計画

実践では児童の意見文を書く力の育成を目指した。そのために意見文の型を系統立てて指導することと合わせ、思考力を高めるための授業改善を並行して行うことを計画した。

主な内容は、以下の3点である。

- (1) 型の定着を目指した学習活動
- (2) 教師主導型学習からアクティブ・ラーニ

ングへの転換

### (3) ルーブリックを活用したパフォーマンス評価

## 第3章 実践の結果

### 1 型の定着を目指した学習活動

#### (1) スピーチの型の指導

6年生の児童を対象にスピーチの型を指導した。児童が事前を書いてきたスピーチ原稿は、楽しかったことや出来事を述べたものが多く、主張に対する理由や根拠が不十分であった。そこで、スピーチの型を学習させるために、NHK-for school『しまった!』を視聴させた。視聴後、『はじめ—中—おわり』型を意識させるためにスピーチシートを配布し、一番伝えたい主張を“はじめ”の部分に書かせた。次に、主張を支える理由や根拠、具体例などを、思いつくままに1事項1枚の付箋に書かせた。書いた付箋は並べ替えたり、不要なものは除いたり付け加えたりし、スピーチの型にあてはめながら清書した。スピーチの型を示すことで、児童は何を書いたらよいか分かったようであった。意欲的に取り組む様子から、型を指導する効果が見取れた。

スピーチの型をもとに清書し、スピーチを行った。実施前に、目線を聞き手に向けて相手を意識して話すこと、間をあけることの2点を指導した。スピーチでは聞き手に問いかけたり、身振り手振りを入れたりする児童もいたため、その都度その良さを共有し、同じようなことができるのであれば挑戦しようと呼びかけた。終了後の感想からは、スピーチの仕方が分かったという話し手の意見だけではなく、『いつもは真剣に聞けないけど、今日のスピーチは聴きやすかったので真剣に聞いた。』という聞き手も学習

の喜びを実感した感想が多くあった。

指導前後のスピーチ原稿を、ルーブリックを用いてパフォーマンス評価したところ、各観点において伸びが見られた。また、学習を苦手としている児童の評価結果が大きく伸びたことから、型を指導することの有効性を確認できた。

#### (2) 意見文の型の指導

6年生の児童を対象に意見文の型の指導を行った。今回の学習では、前時に学習したスピーチの型をさらに深化させ、説得力のある意見文の型を習得することをねらいにおいた。

意見文で一番肝心なところは、読み手を納得させることのできるような理由や根拠、具体例を考え記述することである。そこで、くらげチャートを活用し、主張を支える理由や根拠、具体例などを個人で考え、その後グループで話し合いを行わせた。さらに、グループ内に批判役を設定し、批判されても聞き手を納得させることのできる理由や根拠、具体例を考えさせるよう仕掛けた。批判役の設定は、様々な視点から考えようとする学習効果のある場となった。

“反論に対する反論”についての学習では、児童が理解しやすいようプレゼンを用いて説明を行い、個人で考えたものをグループでも再検討する活動を行った。清書の段階では、児童の多くが原稿用紙の正しい使い方を理解していないという実態から、原稿用紙の使い方のプリントを提示して書かせた。普段は作文になると手を動かすことがなく、固まってしまう児童も、これまでの様子とは異なり熱心に原稿用紙に向かう姿が見られた。このことから、“書く内容”“書き方”の両方を支援することの有効性が確認できた。

書き上げた意見文は各自が推敲を行った後、児童用ルーブリックを配布し相互評価を行わせ

た。児童用ルーブリックを活用した相互評価では、評価を行うだけではなく、誤字脱字や文章表現の分かりにくさ、説明不足などについて互いにアドバイスをを行うなど、友達の意見文を通して学び合う姿が見られた。また、児童の相互評価や教え合いの活動により、教師の添削作業の軽減だけではなく、個々の児童に対応する時間と気持ちのゆとりを生み出すなどの副次的効果もあった。

## 2 教師主導型学習からアクティブ・ラーニングへの転換

6年生社会科において、思考ツール（コンセプトマップ）の活用と、発問の工夫を行うことで、教師主導型学習からアクティブ・ラーニングへの転換を図った。

実習校ではこれまで思考ツールを活用した実績がなく、教師も児童も未経験であった。そのため、導入時に筆者が授業を行い、児童はグループでコンセプトマップ作りに取り組んだ。2回目以降は担任が授業を行い、コンセプトマップ作りも個人で行わせた。授業後には筆者と担任で話し合い、その都度改善策を考え実践した。その結果、社会科の授業でコンセプトマップ作りが定着し、『後で見た時に分かりやすい』『マップを作っていくうちにだんだんとわかっていく』という肯定的評価を多くの児童から得ることができた。なお、書き方が分からず、否定的評価であった児童には、友達のノートを写させてもらうことを勧めた。コンセプトマップを社会科の学習において活用することにより、『聞くだけ・写すだけ』の学習から、『自分で調べてまとめて考える』という能動的学習へ転換した成果を確認できた。

発問については、①熱心に発表する児童がある程度決まっている、②一問一答式の発問が多

く練り合い高めあう場がない、という課題があった。授業観察を分析した結果、知識を問うような発問が多いことから、多様な意見を引き出すことを目的としたオープン・エンド・クエスチョンを取り入れた。さらに、社会科が得意な児童だけでなく、全員が発言できる機会を確保するためにグループやペア学習を取り入れたことにより、ふだんはあまり発表しない児童も意欲的に意見を交わす様子が見取れた。

これら思考ツールの活用やオープン・エンド・クエスチョンの学習効果が文章表現力の向上に与えた直接的効果は現時点において確認することはできていない。しかし、他教科にもこれらの取組を取り入れ、児童の主体的な学びを継続し思考力を高めていくことにより、少しずつではあるが文章表現力の向上に寄与するものとする。

## 3 文章表現力測定

実践1・2を行うことで児童の文章表現力がどの程度高まったのかを確認するために、実践前・後と実践3か月後の計3回、文章表現力測定を行い、ルーブリックを活用してパフォーマンス評価を行った。

文章表現力測定には、国立教育政策研究所教育課程研究センターが平成17年に実施した『特定の課題に関する調査（国語）の中にある『長文記述に関する調査』を参酌し、筆者が作成したものを採用した。また、評価には服部（2004）が高校生の意見文指導において使用したルーブリックを参考に、筆者が作成したものを使用した。評価は、選材・説得力・構成・反論の4観点を筆者と担任で行った。4観点ともに指導前の第1回文章表現力測定と比べ、第2回・第3回の結果において大幅な伸びが見られた。指導後3か月においても選材は結果に変化がなく、

学習したことの定着が確認できた。説得力・構成・反論は若干減少した程度で、おおむね定着していることが確認できた。

## 第4章 実践の成果と課題

### 1 実践の成果と課題

#### (1) 書く内容を考える活動

文章全体の構成を視覚化した型を提示することによって、児童は①どこに何を書けばいいのか、②どのようなことを詳しく述べればいいのか、の2点をイメージすることができた。理由や根拠、具体例などを考える活動では、付箋や思考ツールを活用し、思いつくままに書いたり、書いたものを整理したりするなどの活動を行った。また、これらの教具を活用することは、多様な視点で考えようとしたり、書いた事柄の重要性を検討したりするなど、論理的に物事を考えるうえで効果があった。

#### (2) 実際に書く活動

筆者が、国語教科書（光村図書）を参考に原稿用紙の使い方をまとめ、児童に提示して意見文を書かせた。

取組について、書くことと書き方の両方の支援をすること、児童個々のニーズに応じた指導・支援と意図的な介入指導を連動させたことの要因をまとめた。

#### (3) 書いた文章を相互評価する活動

児童用に作成したルーブリックを活用して相互評価を行わせたことにより、友達の意見文の間違いや説明不足などを付箋に書き込んだり、直接指摘したりするなど、互いに学び合う姿が見られた。この点について、児童の自発性・主体性、学習意欲を刺激したことについてまとめた。

### 2 今後の課題

今後の課題としては、次の3点を挙げておきたい。一つ目は、文種を意識した教師の指導の在り方である。指導すべきポイントは数多くあるが、意見文の指導の際には誤字脱字や文章表現の指導の時間を少し割いてでも、型の定着に時間と労力を注ぐ、つまり、文種に応じて指導すべきポイントに軽重をつけるということが重要ではないだろうか。二つ目は、活字に多く触れさせることである。読書環境の整備をはじめ、学習教材に関係のある本の並行読書、そして、教師も多忙な時間を割いてでも児童と共に読書に浸る姿を見せるなどを心がけていきたい。三つ目は、様々な体験や幅広い知識の習得をさせることである。説得力のある意見文を書くには多くの知識や経験が必要である。日頃から基礎基本の学習以外に、多くの情報を子どもたちが習得できる活動や話題の提供が必要ではないだろうか。

## 第5章 修了後の課題と展望

文章表現力の向上に向けた取組を行う中で、考える力の育成や幅広い知識を身に付ける場の設定、学習意欲の向上を目指す指導の工夫など、様々な学習を関連付けた包括的学習活動に取り組むことが課題であるように思う。子どもたちのために、これらの課題を解決するための取組を実践・検証していくことが必要である。一方、教職員の多忙化や長時間労働に対応するための働き方改革にも取り組まなければならない。

これら双方の課題を解決するために、先生方とのコミュニケーションを密にし、一人で抱え込まない組織、全教職員で目標や課題を共有し支え合える組織作りを目指し、取り組んでいきたい。